

露訳『野草』の注釈について

川 上 久 寿

昨年(1971年)ソ連で新しい魯迅の小説集⁽¹⁾が出版された。この本の注釈は大変よい。1954年出版の四巻本魯迅選集⁽²⁾と1956年出版の一巻本魯迅選集⁽³⁾の注釈はいずれもヴェ・ヴェ・ペトロフ教授の手になるものであったが、今度あらたに出た本の注釈も同じくペトロフ教授が執筆している。本稿ではこの1971年版の注釈のうち『野草』のものをとりあげ、これを前二者と比較してみることにする。それによってソ連における魯迅作品に対する注釈が高い程度にあって、中国や日本にひけをとらぬことが判明しよう。ペトロフ教授の注釈は他山の石とするにたるもので、ソ連の魯迅研究の水準をしめしている。

四巻本魯迅選集(以下出版された順序により《一》と略す)と一巻本魯迅選集(以下《二》と略す)の注釈は基本的には同じで、ただ所々字句を異にしているぐらいなものであるが、《一》の誤りを訂正している個所もある。たとえば、《野草》英文訳本序の最初に見える「馮 Y・S・先生」の部分が《一》では Господин Фэн y となっていたのを Господин Фэн Y・S と訂正している。この程度のちがいであるから、まず《一》の注釈をみて《二》は省くこととする。まず《一》の注釈をみよう。

(1) Лу Синь Повесть и Рассказы Издательство «Художественная литература» Москва. 1971. Вступит, статья Л. Эйдлиг Составление и общая редакция тома Н. Т. Федоренко.

(2) Собрание сочинений в четырех томах Под общ. ред. В. С. Колоколова, К. М. Симонова и Н. Т. Федоренко. [Сост. Л. Д. Позднеева, Вступит, статья Н. Т. Федоренко. Ред. переводов В. С. Колоколов и В. Н. Рогов]. Т. 1-4. М., Гослитиздат, 1954-1955.

(3) Лу Синь Избранное, Государственное издательство художественной литературы, Москва, 1956, Составление и общая редакция Н. Т. Федоренко, Вступительная статья В. Петрова.

『野草』 『野草』は1927年6月北京の『北新書局』から初版が出た。
(この下線の個所は誤りで《二》も同じである。川上) 『野草』(『序』を除く)のテキストは二十卷本魯迅全集(1938年)の第一巻に収められた。

この翻訳は別個に再版されたテキスト、つまり、『野草』人民文学出版社、北京、1952年によった。

『英訳『野草』の序』は非常におもしろい。これは1931年11月5日に魯迅が書いたもので、『二心集』(1932年)に収められた。

(このあとに『英訳『野草』の序』が全訳されているが、ここでは省く。)

『魯迅の小説集』(以下《三》と略す)をみると次のとおり。

散文詩集『野草』は1927年7月上海で初版が出た。

この書物を正しく理解するためには、魯迅が1931年11月5日に書き『二心集』(1932年)に収めた『英訳『野草』の序』が役立つ。

(以下に『英訳『野草』の序』の全訳がつづくが省く。) 下線のように《一》の誤りが訂正されている。

日本の魯迅選集(岩波書店)、中国の魯迅全集(人民文学出版社)(以下《四》と略す)には以上に見たような『野草』の注はない。日本の魯迅選集(第一巻)には『野草』について』という解説があり、それには次のように中国の全集にもロシアの選集にもみえない記述がある。『一九二七年七月、北新書局から出版された散文詩集。四六判、目次四ページ、本文九四ページ、紙装、表紙は孫福熙の淡彩画の二色刷り。』四六判以下の記述はこの選集以外では読むことができない。この版本はごく少数の人が所蔵しているか、或いは限られた図書館にしか所蔵されていないだろうから、われわれの眼には容易にふれないものであるだけに、岩波魯迅選集の竹内好先生の記述はありがたい。

小序(題辭)括弧内は中国語の原文(以下同じ)

蔣介石が上海で反革命の裏切りを行ってから二週間後の1927年4月26

日に広東の白雲楼で書かれた、正に国民党権力による残酷な政治テロという環境のもとにおいてである。『野草』には反動にたいする抵抗の姿勢がみえ、また偽装のうちにも必然的に勝利すべき革命思想が表現されている(『死火』)。

以後の出版(1928年4月の第四版からのもの)になると『題辞』は国民党の検閲により削除された。魯迅は1936年2月19日付の夏傳経あての手紙にこう書く。

『貴翰ありがたく拝誦いたしました。『豎琴』の序は政府の検閲で削られました。『野草』の序もおなじ運命をたどるものと思われます。これについては、これまで何回も書店と話をしたのですが、何の役にもたちません。』

これに対して、「三」の注釈は次のとおり。

1927年7月2日『語絲』誌上に初掲載。ロシア語への訳者はヴェ・ヴェ・ペトロフ(B. B. Петров)、四巻本魯迅選集、第一巻、モスクワ、1954年。

1928年4月出版の『野草』第四版では国民党の検閲のため『題辞』が削られている。そこに、偽装されたうちにも革命への共感、蔣介石の反動的裏切り後の中国の社会秩序にたいする批難、つまり造反を見たからである。それ以来1941年に至るまで『題辞』がのせられることは全くなかった。魯迅は夏傳経あての手紙にこう書いている。

『豎琴』の序は政府の検閲によって削られました……『野草』の序もおなじ運命をたどるものと思われます。私はこれまで何回となく書店と話合いをしましたが、序は本に入れられませんでした……』

以上の両者を比較すれば後者のほうがより詳細、厳密になっていることがわかるし、中国語からの翻訳もよくなっている。下線を施した個所を対照していただきたい。夏傳経あて書簡中引用した最後の部分(下線の個所)は中国語では『我曾向書店說過幾次，終于不補』である。参考のために記す。『題辞』については魯迅全集(人民文学出版社)がくわしい注釈をつけては

いるが、それでも『1928年4月出版の『野草』第四版では国民党の検閲のため『題辞』が削られている』という《三》や《一》のように年月や版までの記述はない。すなわち、后来被国民党政府書報検査机关抽去，至1941年上海魯迅全集出版社出版《魯迅三十年集》时才重新收入（后日国民党政府の検閲機関に削られ，1941年上海の魯迅全集出版社が《魯迅三十年集》を出版したときはじめて新たに収められた）となっている。ここに『秋夜』以下二十三篇の注を掲げる。

秋の夜（秋夜）《一》

著名な文芸学者王瑤の説くところによると、この散文詩は魯迅が1942年5月から住んでいた北京の西三条胡同二一号の家の内庭を描いたものだという（王瑤著，魯迅と中国文学，平明出版社，1953年，146頁）。これについては『狂飈社』で魯迅を知っていた尚鍼が『わたくしの生涯と学習』という追憶記で確認している。

秋の夜（秋夜）《三》

1924年12月1日，雑誌『語絲』に初掲載。ロシア語訳はエリ・ゼ・エイドリソフによる。魯迅選集，モスクワ，1945年。

この散文詩は北京西三条胡同二一号の家の内庭の敘述である。魯迅はこの家に1924年の5月から1926年8月まで住いた。1956年ここは魯迅記念博物館として公開され，魯迅が讚えでもするように書いた伐り倒された棗の代りには他の棗の樹が植えられた。

影の告別（影的告別）《一》

これとこれにつづく一連の散文詩には魯迅思想の内的矛盾が反映され，

かれの探求と沈思の世界がひらかれている。当時のかれの気持としては戦いの隊伍に入ろうと決めてはいながらも、まだ革命的な勢力に合流してはいなかった。そのころの魯迅の立場を特徴づけて、中国の有名な批評家馮雪峯はいう。

『……いっぽうで、かれ（魯迅——ヴェ・ヴェ・ペトロフ）は古い思想や気分をいくらかもっていたが、他面なお自分の矛盾した気分をつよく反映していた。かれが自己分析をして、若干の旧思想、とりわけ個人主義にもとづいた旧思想を否定していることは特にはっきり見ることができる（馮雪峯、回憶魯迅、人民文学出版社、北京、1953年、20頁）。

魯迅自身は蕭軍あて1934年10月9日付書簡に書いている。

『わたくしの本『野草』は技巧からいえば決してまずくはないと思われまます。しかし心情的には頗る意気消沈しております。というのは、おびただしい困難に出くわした後に書いたものだからです。あなたがたがこういう頹廢的気分の影響からぬけ出すことを望みます』。

影の告別（影的告別）《三》

1924年12月8日『語絲』に初掲載。ロシア語訳者はヴェ・ヴェ・ペトロフ、魯迅選集（四巻本）、モスクワ、1954年の第一巻に収められている。

これとその後につづく一連の散文詩には魯迅が多くの旧思想を断乎として否定し、空虚、うるわしい幻想と暗黒に抗して立ち上り、批判的に過去を再評価し、新思想を探索しつつあった自己を肯定しようとした時代の魯迅の探求と沈思の複雑で矛盾している不安定な世界がひらかれている。だが、まだ孤独の気分に完全に打ち勝ってはおらず、かれを苦めていた疑惑と矛盾を徹底して解明できなかった。

1934年10月9日付蕭軍あて書簡に魯迅は書いている。

『わたくしの本『野草』は技巧の点からみれば決して拙いとは思えません。だが、これにはあまりにも多くペシミズムがあります。それというの

多くの困難にぶつかった後に書いたものだからです。あなたがこの気分
に圧倒されないように』。

乞食（求乞者）《一》

なし。

乞食（求乞者）《三》

1924年12月8日『語絲』に初掲載。ロシア語訳者はエリ・ゼ・エイド
リン，魯迅選集，モスクワ，1945年。

わが失恋（我的失恋）《一》

なし。

わが失恋（我的失恋）《三》

この詩は1924年12月8日『語絲』初掲載。ロシア語訳者はウラジミ
ール・ロゴフ，魯迅選集（四巻本），モスクワ，1954年。

魯迅がこれを書いたのは，その言によると，『当時流行の恋愛詩を冷や
かそうとした』ものである。『ア－ア』とか『われわが身をほろぼさん』な
どに類した失恋詩の隆盛さに，それを嘲笑すべく詩の最後をばわざと『いや
しかし，どうにでもしろい』で終らせた。『わが失恋』は形式上は詩人で学
者の張衡（78-139）の四愁詩をもじったものだが，内容からいえば唐の詩人
張打油の馱酒落の詩，パロディーである。張打油はその詩の中で詩句の間の
論理的関係をぶちこわしたのみならず意表をつくコントラストで滑稽の効果
をかもし出した。

復讐（復仇1）《一》

なし。

復讐（復仇1）《三》

1924年12月29日『語絲』に初掲載。ロシア語訳者はヴェ・ヴェ・ペトロフ，魯迅選集，1956年。

分 長さの単位で3.3 mm。

復讐（復仇2）《一》

なし。

復讐（復仇2）《三》

1924年12月29日『語絲』に初掲載。ロシア語訳者はヴェ・ヴェ・ペトロフ，魯迅選集，1956年。

キリストの磔の場面は中国語訳『新約聖書』の『マタイ伝第二七章』と『マルコ伝第一五章』によっている。

希望（希望）《一》

ペチェフイー・シャンドル（1823-1849）はハンガリイ革命の偉大な歌い手で，魯迅の愛好する詩人のひとり。魯迅はその評論でしばしばペチェフイーの作品にふれている。『野草』と同時に1925年1月には『語絲』に魯迅訳のペチェフイーの詩が六編のった。

希望 (希望) 《三》

1925年1月19日『語絲』に初掲載。ロシア語訳者はヴェ・ヴェ・ペトロフ、魯迅選集(四卷本)、モスクワ、1954年、第一卷所収。

シャンドル・ペチェフィーは魯迅の最も愛好する詩人のひとりで、このひとの作品については自分の評論中で何回となくふれている。かれはペチェフィーの詩を中国に宣伝しようと尽力した。同時に『希望』とともに1925年1月『語絲』に魯迅訳のペチェフィーの詩が五編のった。

雪 (雪) 《一》

江南 南中国のこと、江は揚子江の意。

雪 (雪) 《三》

1925年1月26日『語絲』に初掲載。ロシア語訳者はテ・サモイロフ、『東洋文芸作品集』、第一卷、モスクワ、1947年。ヴェ・ヴェ・ペトロフ、魯迅選集(四卷本)、モスクワ、1954年、第一卷所収。

江南 揚子江の南方地域、つまり南中国。

磬 (цинь) 打楽器に属する古代楽器名。

凧 (風箏) 《一》
たこ

なし。

凧 (風箏) 《三》
たこ

1925年2月2日『語絲』に初掲載。ロシア語訳者はエリ・ゼ・エイド

リン, 魯迅選集, モスクワ, 1945年。

すばらしい物語 (好的故事) 《一》

『初学記』唐 (7世紀) の学者徐堅が皇帝の命によって編纂した文集。
これは中国で『類書』に属する最初の百科全書のひとつである。

すばらしい物語 (好的故事) 《三》

1925年2月9日『語絲』に初掲載。ロシア語訳者はヴェ・ヴェ・ペトロフ, 『こよなく素晴らしかりし時』と訳す, 魯迅選集 (四巻本), モスクワ, 1954年, 第一巻所収。

『学習の初歩』(『初学記』), 題目別に選別し配列された各種のテキストを系統的に集めたもので, 中国最初の百科全書のひとつ。この百科全書は皇帝の命によって徐堅 (659-729) をはじめとする多くの学者によって編纂された。

山陰道, 紹興 (浙江省) から南西へ通じる道, そこは絵のように風光明媚なため全中国に有名。山陰は紹興の昔の呼び名。

旅人 (過客) 《一》

なし。

旅人 (過客) 《三》

1925年3月9日『語絲』に初掲載。ロシア語訳者はヴェ・ヴェ・ペトロフ, 魯迅選集, モスクワ, 1956年。

死火（死火）《一》

なし。

死火（死火）《三》

1925年5月4日『語絲』に初掲載。ロシア語訳者はヴェ・ヴェ・ペトロフ、魯迅選集（四巻本）、モスクワ、1954年、第一巻所収。

犬の反駁（狗的駁詰）《一》

なし。

犬の反駁（狗的駁詰）《三》

1925年5月4日『語絲』に初掲載。ロシア語訳者はア・アシュトゥーキン、『犬との対話』と訳す。『魯迅 1881-1936』、モスクワ、レニングラード、1938年。エリ・ゼ・エイドリソフ訳、魯迅選集、モスクワ、1945年、所収。

失われた地獄（失掉的好地獄）《一》

劍樹 地獄で罪人がうける責苦の道具。

阿旁 地獄に住む悪魔のひとつで、頭は牛、手は人間、足に蹄がある。山を動かせるほどの力がある。

うるわしかりし失われた地獄（失掉的好地獄）《三》

1925年6月22日『語絲』に初掲載。ロシア語訳者はヴェ・ヴェ・ペトロフ、『失われた地獄』と訳す、魯迅選集(四巻本)、モスクワ、1954年、第一巻所収。

劍樹 地獄で罪人がうける責苦の道具。

阿旁 地獄に住む悪魔の一種で、頭は牛、蹄があるが、手は人間。阿旁は山を動かせるほど力がつよい。

墓碑銘(墓碣文)《一》

なし。

墓碑銘(墓碣文)《三》

1925年6月22日『語絲』に初掲載。ロシア語訳者はヴェ・ヴェ・ペトロフ、魯迅選集(四巻本)、モスクワ、1954年、第一巻所収。

滅びの子感の戦慄(頽敗線的顫動)《一》

なし。

滅びの子感の戦慄(頽敗線的顫動)《三》

1925年7月13日『語絲』に初掲載。ロシア語訳者はヴェ・ヴェ・ペトロフ、『滅びの道への戦慄』と訳す、魯迅選集(四巻本)、モスクワ、1954年、第一巻所収。

判断(立論)《一》

原文の『満月』に相当する個所の注、「中国の習慣では生後一カ月の赤子をお客さまの前へ抱いて来て見せ、その将来をうらなってもらおう。」

判断（立論）《三》

1925年7月13日『語絲』に初掲載。ロシア語訳者はエリ・ゼ・エイドリ
ン、魯迅選集、モスクワ、1945年。

『生れて一カ月目にその子をお客さまの前へつれて来る』民間の習慣では、生れて一カ月目にその将来をうらなってくれるお客さまの前へつれて来て見せる。

死後（死後）《一》

なし。

死後（死後）《三》

1925年7月20日『語絲』に初掲載。ロシア語訳者はヴェ・ヴェ・ペト
ロフ、魯迅選集（四巻本）、モスクワ、1954年、第一巻所収。

明版 明（1368-1644）の時代に出版されたもの。

公羊傳 中国で広く知られている『春秋』の注釈で、公羊高（紀元前5
世紀）の書いたもの。

嘉靖 明の世宗皇帝（1522-1566）治世の年号。

このような戦士（这样的战士）《一》

なし。

このような戦士（这样的战士）《三》

1925年12月21日『語絲』に初掲載。ロシア語訳者はヴェ・ヴェ・ペトロフ、魯迅選集（四巻本）、モスクワ、1954年、第一巻所収。

緑營兵 1644年から1911年まで中国を支配した清の時代『八旗』という主として満洲人により編成された軍隊と異り、漢人からなる軍隊だったのでこの名がある。

東方文明 保守主義者は『東方文明』の擁護を唱えることによって、新しい民主主義文化とたたかうためにこのスローガンを巧みに利用した。『東方文明』の擁護ということは、かれらにとって古代にもどることであり、また封建文化の支配を復活することにほかならなかった。

護心鏡 清の兵隊は悪魔や弾丸よけとしてこれを胸につけていた。

賢人と馬鹿と奴隷（聰明人和傻子和奴才）《一》

銀耳 木くらげ、食用きのこの一種で珍味とされ、また薬用にも供せられる。

賢人と馬鹿と奴隷（聰明人和傻子和奴才）《三》

1926年1月4日『語絲』に初掲載。ロシア語訳者はマルデル、『東洋文芸作品集』第一巻、モスクワ、1947年。ヴェ・ヴェ・ペトロフ訳、魯迅選集（四巻本）、モスクワ、1954年。

銀耳 木くらげ、中国料理の珍味のひとつで薬用にも供せられる。

枯れ葉（臘叶）《一》

『**雁門集**』 詩と散文を集めたもの。著者は元の有名な詩人薩都刺（1308

年死亡)《中国文学家列〇, 楊陰深編著によると(1308-?)となっている一川上》, 蒙古系のひとで漢語で書いた。国境の関所たる雁門関に生れたので, おのが詩文集にその名をとった。

枯れ葉(臘叶)《三》

1926年1月4日『語絲』に初掲載。ロシア語訳者はヴェ・ヴェ・ペトロフ, 魯迅選集(四巻本), モスクワ, 1954年, 第一巻所収。

『雁門集』元の有名な詩人薩都刺(14世紀)の詩集。漢語で書いた蒙古系のひとで一時雁門関に住んでいたことがある。

淡き血痕のなかに(淡淡的血痕中)《一》

北京の三・一八事件(1926年)の後に書かれた。この日, 大沽口における日本の軍事裁判の開始, 中国主権の侵害, 軍閥の売国政策に反対する大衆の愛国的なデモが行なわれた。段祺瑞政府は身に寸鉄なき大衆にむけて発砲した。三百人余りが殺されたその中には多くの学生がおり, 魯迅の弟子もいた。魯迅はこの散文詩のほかにも三・一八事件のため雑感を何篇か書いている(『劉和珍を記念して』『花なきバラ』『惨めさと可笑しさ』『死地』)。反革命暴力による犠牲者を悼みながら, 魯迅は軍閥の裏切り政策を憤りをこめて暴露した。

淡き血痕のなかに(淡淡的血痕中)《三》

1926年4月19日『語絲』に初掲載。ロシア語訳者はヴェ・ヴェ・ペトロフ, 魯迅選集(四巻本), モスクワ, 1954年, 第一巻所収。

三・一八事件(1926年)に感じて書いたものである。それは日本帝国主義の厚顔無恥な侵略, 中国主権の侵害, 段祺瑞政府の売国政策に反対する大衆の愛国的なデモが北京で行なわれた事件である。デモが天安門から段祺瑞

の邸宅へ向ったとき、警備隊が身に寸鉄もおびぬ群衆に発砲したうえ、銃剣と軍刀も使用した。その結果二百名が死傷した。死傷者のなかには魯迅の弟子の北京女子師範大学の学生もいた。この散文詩のほかに魯迅は三・一八事件のため何篇かの評論（『劉和珍を記念して』『花なきバラ』『惨めさと可笑しさ』『死地』）を書いた。反革命暴力による犠牲者を悼みながら、魯迅は軍閥の裏切り政策を憤りをこめて暴露した。

めざめ（一覚）《一》

馮玉祥の軍隊が日本の尻押しをうける張作霖と吳佩孚の連合軍のため北京を追われるという軍閥戦争時代の1926年4月に書かれた。

天下 つまり中国のこと。

北京大学 中国の最高学府のひとつ(1898年創立)で、中国新文化運動の中心。その歴史は中国人民の革命斗争とのむすびつきが極めてつよい。魯迅は1920年から1926年にわたって北京大学で文学の講義をした。かれは進歩的学生の要求を積極的に支持し、章士釗みたいな反動的学者文人とは断乎としてたたかった。『わが北京大学観』（『我観北大』）（1925年12月13日）に魯迅は書いている。

『第一に、北京大学は進歩的な運動の前衛であり、中国の安居楽業を望む人びとの前進すべき道を指し示した。数多い暗矢がそれに命中したにせよ、多くのデマが流されようとも、年年歳歳教授、学生は人を変えてゆくにしても、新らしきものを志向するその精神だけはつねに生きつづけている……』

第二に、北京大学は暗黒勢力とたえず戦っている……』

『浅草』 1924年に上海で同名の文学グループが出した雑誌。これに加っていた主なひとは、陳翔鶴、炜謨、高世華、韓君格などの作家、詩人の馮至であった。雑誌の基本的なスローガンと方向は『芸術のための芸術』であった。

『沈鐘』 1925年10月北京で『浅草』をこの名で続刊した。この雑誌に

参加した人びとは大体において前のおりで傾向も変りなかった。雑誌に加った人びとは西洋の作家（ワイルド、ボードレール、ギッソング）に関心をいただいた。魯迅は『中国新文学大系小説二集』（1935年3月2日）でこの雑誌の傾向を特徴づけてこういう。

『1924年上海にあらわれた『浅草社』は紛れもなく『芸術のための芸術』の文学者の団体だった。そうして出版された季刊は毎度その力をあきらかにした。外には外国の精神的食糧をとりいれ、内では自己の魂をあばきだした。この世をじっと見凝め、悲しみ多い人びとに真実のうるわしい歌をきかせるために心の眼と舌をしめしたかったのである。翌る年、文学団体の中心は北京に移り、参加者の一部は去って、『浅草』季刊は週刊の『沈鐘』になってしまった……

しかし、当時めざめた知識人、青年の気分は概ね熱烈なものがあつたが、また悲しいものでもあつた。もしかれらが光明を求めたとすれば、かれらの周囲の暗黒をもっとはっきり見ただろう』。

めざめ（一覚）《三》

1926年4月19日『語絲』に初掲載。ロシア語訳者はヴェ・ヴェ・ペトロフ、魯迅選集（四巻本）、モスクワ、1954年、第一巻所収。

1926年4月に直隸軍閥の馮玉祥軍と奉天軍閥の張作霖と李景林の軍隊との戦争の時に奉天軍の飛行機が何回か北京を急襲して爆弾をおとした。

北京大学 中国で最も古い大学のひとつ（1898年創立）で、中国新文化運動の中心。その歴史は中国人民の革命斗争と固くむすびついている。魯迅は1920年から1926年にかけて中国文学史を講じた。かれは進歩的学生の要求を積極的に支持し、章士釗のような反動的学者、文人とは断乎としてたがかった。

『浅草』 1924年に同名の文学団体が上海で出した雑誌。これに加盟した若い文学者は陳翔鶴、陳炜謨、韓君格、林如稷、馮至である。雑誌の発行

は不定期で、四号を出したにとどまり1925年2月『浅草』は廃刊になった。魯迅が述べた『無名の青年』とは明かに陳炜謨のことで、当時かれは北京大学の英語英文学部に学びながら自ら進んで魯迅の中国小説史の講義に出席していた。陳炜謨が『浅草』社の出版物をずっと魯迅におくっていたことは明らかである。

『沈鐘』 同名の文学グループの機関誌として1925年10月から12月まで北京で出た週刊の文学雑誌。その中核となったのはそれまで『浅草』から閉め出されていて再び加った若い文学者だった。1926年8月に『沈鐘』は再刊されたが、それはもう二週間おきに出るものとなり1927年1月まで発行され、1932年から1934年のうちに再度発行された。この雑誌の同人はヨーロッパの作家（ワイルド、ボードレール、ギッシング）に傾倒していたから、ハウプトマンの戯曲のひとつを自分たちの文学団体と雑誌の名にしたのも頷かれることで偶然ではない。『中国新文学大系小説二集』の序で、魯迅魯迅はこの雑誌の傾向を特徴づけ、『芸術のための芸術』と『自己表示』の立場にたつ出版物ではあるが、『この世をじっと見凝め』、『悲しみ多い人びとに真実のうるわしい歌を聞かせよう』と書いた。

トルストイは一篇の小説を書いた 『ハゲー・ムラート』のこと。

以上によって見ると、《一》では次の十二篇つまり、『乞食』、『わが失恋』、『復讐1』、『復讐2』、『凧』、『旅人』、『死火』、『犬の反駁』、『墓碑銘』、『滅びの予感の戦慄』、『死後』、『このような戦士』には注釈がない。それが《三》になると注釈のないものはひとつもなくなっている。参考のため『魯迅全集』（人民文学出版社）をみると、注釈のないのは、『影的告别』、『求乞者』、『雪』、『風箏』、『过客』、『死火』、『狗的駁詰』、『墓碣文』、『立論』、『聪明人和傻子和奴才』の十篇であり、《三》と共通するものは『乞食』、『凧』、『旅人』、『死火』、『犬の反駁』、『墓碑銘』の六編である。このように《三》は従来の魯迅全集、魯迅選集で中国、日本、ソ連をとわず、少なくとも『野草』にかんするかぎり（その他の作品についてもいえるかと思うが）各篇の

すべてに注釈を付している点だけでも劃期である。さらにその内容についていえばこれまた進歩のさまが伺われる。日本の迅魯選集（岩波書店，青木書店）などには注釈がないし，中国の魯迅全集（人民文学出版社）は前に見たとおり注釈のないものが十篇もあるだけではなく，注釈の厳密周到さでも《三》に比しやや遜色があるからその点をみてみよう。

『魯迅全集』（人民文学出版社）の『野草』の『題辭』の注釈では、『本書所収散文詩 23 篇，最初都曾陸續发表于 1924 年 12 月至 1926 年 1 月的《語絲》週刊第 3，7 期（1924 年 12 月）第 10，11 期（1925 年 1 月）第 12，13 期（1925 年 2 月）第 17 期（1925 年 3 月）第 25 期（1925 年 5 月）第 32 期（1925 年 6 月）第 35，36 期（1925 年 7 月）第 58 期（1925 年 12 月）第 60 期（1926 年 1 月）上。』とあるが，《三》では、『秋の夜』が 1924 年 12 月 1 日，『影の告別』1924 年 12 月 8 日，『乞食』1924 年 12 月 8 日，『わが失恋』1924 年 12 月 8 日，『復讐 1』1924 年 12 月 29 日，『復讐 2』1924 年 12 月 24 日，『希望』1925 年 1 月 19 日，『雪』1925 年 1 月 26 日，『風』1925 年 2 月 2 日，『すばらしい物語』1925 年 2 月 9 日，『旅人』1925 年 3 月 9 日，『死火』1925 年 5 月 4 日，『犬の反駁』1925 年 5 月 4 日，『うるわしかりし失われた地獄』1925 年 6 月 22 日，『墓碑銘』1925 年 6 月 22 日，『滅びの予感の戦慄』1925 年 7 月 13 日，『判断』1925 年 7 月 13 日，『死後』1925 年 7 月 20 日，『このような戦士』1925 年 12 月 21 日，『賢人と馬鹿と奴隷』1926 年 1 月 4 日，『枯れ葉』1926 年 1 月 4 日，『淡き血痕のなかに』1926 年 4 月 19 日，『めざめ』1926 年 4 月 19 日となっている。以上のように『語絲』にのった年月日まで詳しく記しているから資料不足の者にとって誠にありがたいことである。中国の魯迅全集の注釈よりも進んでいるという所以である。

『迅魯全集』（人民文学出版社）の『秋夜』の注釈は全く素気なく《三》のような記述はない。魯迅の時代を軀をもって知っている人びとが少なくなった現在では（この全集編集の時の 50 年代も含めて）《三》程度の注はほしかった，中国人としては注を施すだけのこともなく自明のことだったにしても，《三》に『伐り倒された棗』とあるが，これについては『后来牆外邻家

的两株棗樹都死掉了。1956年，博物館按照原来的位置补种了两棵』（魯迅博物館，北京魯迅博物館編，文物出版社，1959年，1頁）（後に塀の外にあった二本の棗の樹は枯れてしまった。1956年博物館はもとの場所に代りの二本を植えた）とあるから枯れたので伐り倒されたとみえる。

『わが失恋』これが擬古的な詩であることを東漢の張衡をあげて説明していることは《三》《四》ともに軌を一にするが，《三》は張打油という唐の詩人まであげて，それもわれわれが聞いたこともないような人の詩の影響或いは類似性をあげているあたり大したものである。

『復讐』については特にとりあげることもない。

『希望』に関する《一》の記述の誤りは《三》で訂正されている（下線の部分）。また《四》にはこういう記述がある，『他曾参加1848-49年的反抗奥地利压迫的战争；这次战争，由於沙皇俄国帮助奥国，匈牙利遭受了失败；裴多菲就在这一次战争中陣亡』（かれは1848から1849へかけてのオーストリアの圧迫にたいする抵抗の戦争に加わった。ツァーのロシアがオーストリアを援助したため，ハンガリーの抵抗は失敗の憂き目にあい，ペトフィーはこの戦争で戦死した。）おもしろいことにこれに類する記述は《一》《二》《三》を通じて欠けている。この点では《四》のほうが勝ち勝る。

『好的故事』《四》には《三》にないような『伽藍』とか『一丈紅』の注があるだけで格別とりあげることもない。

『失掉的好地獄』『劍樹』についての《三》の注釈は誤りになろう。《四》では『佛教傳説：在“劍樹地獄”里，刀劍密集，好像樹林，称为“劍樹”』（仏教の言い伝えによると，劍樹地獄にはまるで林のように刀劍が密集している所以この名がある）とあって，『地獄で罪人がうける責苦の道具』ではない。

『頽敗線的顛動』《四》には『瓦松』という植物の説明があるが，《三》ではない。

『死后』《四》には『牙齒齧』というようなむずかしい字や言葉に『牙齒酸軟的一种感覺』（歯の痛むような感覺）と注してあるほか，線装書につい

ての注があるが、「三」では西洋人にはわからないような『明版』『公羊伝』などの注がある。

『这样的战士』「三」「四」とも『緑營兵』と『東方文明』について同じような注釈をつけているだけで、とりたてることもない。

『臘叶』「四」が『《雁門集》』詩集、元朝薩都刺(天錫)著』とあるだけなのに、「三」はもっと詳しい。

『淡淡的血痕中』「四」が『参看《華蓋集續編》中《無花的薔薇之二》』、『死地』、『《記念劉和珍君》等篇』とあるのよりくわしい。

『一覚』『浅草』と『沈鐘』にかんしては「三」のほうが「四」よりも綿密詳細である。

1972. 8. 4.